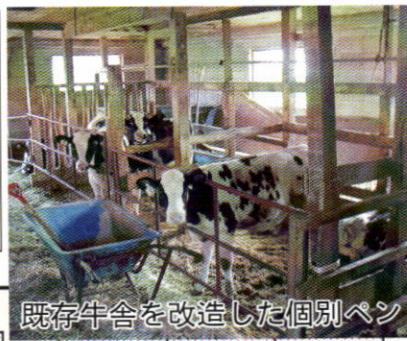


ほ育舎のレイアウト例（既存牛舎改造編）

これまで使用していた既存牛舎を改造して飼育する場合も、作業性を考えてレイアウトします。けい留式の牛舎を改装した場合、これまで使用していた飼槽をそのまま利用することができますし、牛乳処理室として使用していた場所を準備室として利用できます。なお、牛床から壁までいっぱいに区切って使用する場合、飼槽と牛床の間に段差があるため、これによりケガをしないように、凹凸を埋めて平らにする必要があります。

既存の牛舎では、成牛舎の中に子牛を単独で入れるベンがある場合もあり、それを個別ベンとしてそのまま利用することができます。新たに仕切る場合、カーフハッチの条件を参考にし、子牛同士の接触を避けるようにしましょう。また、育成牛と一緒に飼育する場合、子牛の下痢などを防止するためにも育成牛の糞尿が子牛にかかるないようにします。



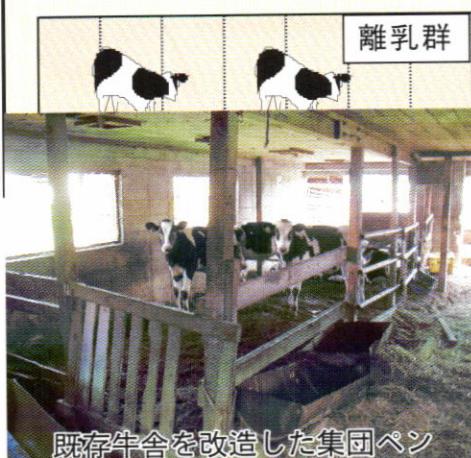
除糞通路



既存牛舎を改造した個別ベン

個別ほ育

飼槽通路



あまり大きなスペースはとれませんが、既存の柱などをを利用して仕切ることで、集団ベンにすることができます。壁いっぱいまで使用する場合、凹凸を埋めて牛床を平らにすることが必要です。



個別ほ育

既存牛舎を改造した集団ベン

準備室
(旧牛乳処理室)

図 既存牛舎を改造したほ育舎のレイアウト例

ちょっとひと工夫



ビニールハウスの
ほ育舎

こんな牛舎もあります

ビニールハウスのほ育舎です。ビニールハウスは温度が上がりやすいため、屋根に寒冷紗をかけて直射日光を防ぐと共に、ハウスの横に換気口を設けています。



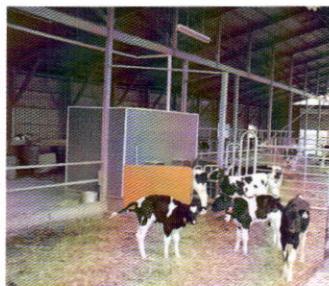
ほ育枠で子牛の隔離にひと工夫

牛舎の片隅を個別ベンに

ほ育枠を用意してあるところでは、牛舎の片隅に敷料を敷き、その上に枠をおいてほ育しているところもあります。集団ベンで1頭が下痢をしている場合も、これを使って隔離しています。成牛舎内に設置する場合は、換気を良くすることを忘れずに！

自動ほ乳システムを用いた群管理

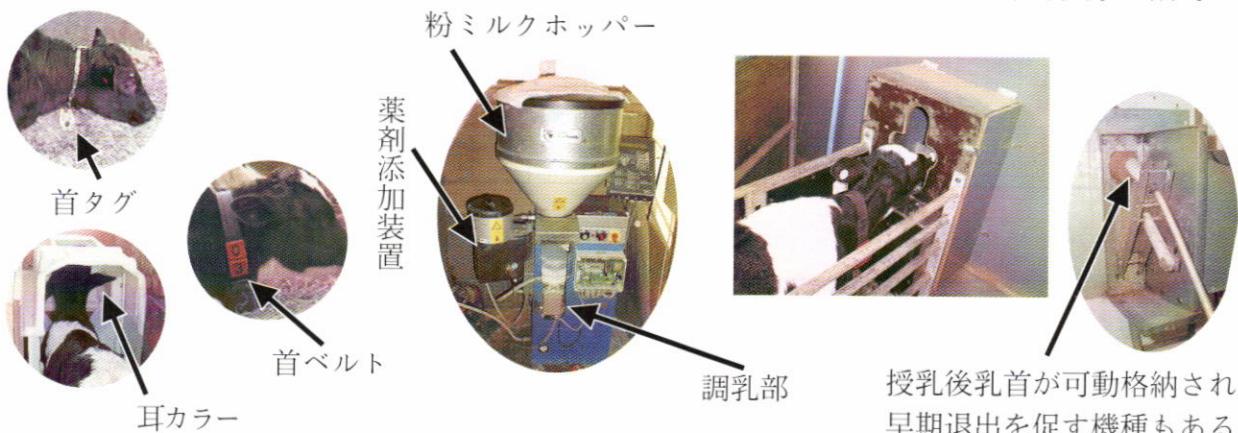
自動ほ乳装置の利用は、省力化のみならず、少量多回ほ乳による下痢の低減、群飼養下での学習効果が見られます。さらに、固体飼料の早期摂取や個別飼養から群飼養への移行ストレスが無いなど、良好な発育がみられたと報告されています。しかし、個体の観察や衛生管理を怠ると、疾病の発生を助長するので注意が必要です。



自動ほ乳装置

自動ほ乳装置は、コンピューターにより個体を識別し、給与量の設定や実際の飲み具合を管理し、群飼育の子牛に1日数回のは乳をおこなう装置です。

個体識別 → 調乳装置でミルクを調製 → ほ乳枠場で給与



当地では、次の3タイプが導入されています。(写真は調乳装置部分)

①ヨーロッパ製の機種 ②アメリカ製の機種 ③地元(中標津)電気店製作の機種



各機種の概要

	価格(万円)	識別装置	ほ乳可能頭数	乳首	制御コンピューター(PC)	薬剤等添加
①ヨーロッパ製	158	首ベルト	60頭(30×2群可)	可動タイプ	内蔵PC標準装備	オプション
②アメリカ製	75	耳カラー	30頭1群	固定タイプ	内蔵PC標準装備	対応不可
③国 内 製	150	首 タ グ	30頭1群	可動タイプ	外部PC標準装備	対応不可

* 価格は普及センターで調査。ほ乳調乳機本体、識別装置(30頭1群分)、ほ乳枠場、付属コンピューターの合計であり、オプション装備、設置工事費、断熱部屋設備、飲水施設等は含まない。

* ヨーロッパ製、アメリカ製は生乳を加温し給与できる機種もある。